

有明高専

図書館報

No. 16



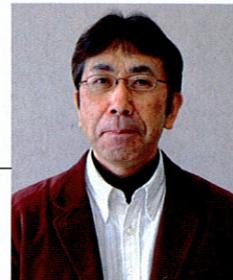
目 次

巻頭言	2
「私の薦める一冊の本」紹介文	3~6
教職員推薦図書	7
読書感想文紹介～古今東西の文学作品を題材に～	8~9
学生図書委員によるブックリサイクル活動報告	9
2010年 美術ギャラリー新着作品紹介	10
図書館統計	11
郷土の文化財・編集後記	12

卷頭言

～19世紀の読書と21世紀の読書の姿～

図書館長 燃山 廣志



読書にまつわる話として鶴ヶ谷真一氏の著（『月光に書を読む』）に次のようなものが紹介されていることを、11月3日付 朝日新聞のコラム「天声人語」の中で触れていた。興味ある内容なので以下、鶴ヶ谷氏の一文を引用してみる。

19世紀のヨーロッパでの話。ひとりの本の好きな貧しい少年が、いつも仕事の行き帰りに書店の前で立ち止まり、ショーウィンドー眺めていた。そこには一冊の本が、巻頭の扉をみせて飾られていた。読みたくてもその子には本を買うお金がなかった。ある日、ショーウィンドーをのぞくと、本のページが一枚めくれてあり、少年はその開かれたページを読んだ。翌日もまた、ページが一枚だけめくられており、少年はつづきを読み進んだ。そんな風にして毎日めくられてゆく本を、少年は何か月もかかってすっかり読み終えることができた。

（『月光に書を読む』古書店の思い出 81頁）

片や21世紀、2010年の後半に入って、日本の出版業界に大変革の波が押し寄せようとしていることを告げる事態が出てきた。【電子書籍】の本格的な普及に向けての出版業界の再編の動き、それをソフト面とするならば、それをハード面から後押しする【電子書籍端末】（電子書籍を読み取る端末機器）の、日本市場への本格的投入の動きである。そこにはアメリカにおいて既に廉価な電子図書端末の普及に伴い、電子書籍の爆発的ブームの起きたことが大きく影響している。

〈百聞は一見に如かず〉と、私も12月に発売された電子書籍端末を早速、購入してみた。すでに購入時に入っている新書やパソコンから版元の切れた無料で公開している書籍をダウンロードして閲覧してみた。

これが、実に読み易いのである。紙でなければ[書を読む]媒体にはなり得ないと考えていたことが、いとも、た易く崩れ去るような、そんな衝撃を受けた。モノクロだが、これが目にすこぶる優しいし、疲れない。そして、紙の本をめくる感覚をこの端末でも堪能できる。しおりも付けることが出来るし、この端末の書籍の本文にアンダーラインもマーカーも付すことも出来るのである。そして文庫本なら千冊以上のものがこの端末に収めることができる。室内だけでなく、屋外、太陽光線のもとでもはっきりと読み取れる。こうした端末がこれから本格的に普及すれば、電車やバスの通勤・通学風景が一変する日もそう遠くないのではないかと思えるような体験だった。しかも年齢に関わりなく、高齢者にも受け入れられるような素地が、この端末には備わっているように思えた。今後のこのような端末の普及の成否には、端末そのものの操作性の向上、価格の適正化、そして肝心の電子書籍の充実と多様化が如何にはかられるかに掛っていよう。ともかくそこに「読書の姿」の大変化を起こしうる可能性がこの端末と電子書籍には秘められていることを確信した。そして今後、こうした「読書の姿」の変化は図書館そのものの存在価値にも大きな影響を与えるに違いない。有明高専の図書館もその例外ではない。

そうした中で、有明高専では、今年も本校独自の試み、【私の薦める一冊の本】という学生の手によるブックレビューコンテストの試みを昨年に引き続き行った。402編という昨年以上の応募があり、審査員よりうれしい悲鳴が上がるような結果となった。その中から10編の作品を選出し、この小誌に紹介している。そこにはどの作品にも、学生の瑞々しい感性で書との邂逅の喜びが伸び伸びと語られていることが実感できる。

審査の労を厭わず真摯に応募作品の審査にあたって頂いた教職員の方々に感謝申し上げるとともに、なによりもこのコンテストに積極的に取り組んでくれた有明高専の学生諸君の熱意に大きな希望を抱くことが出来た。

〈読書の姿〉に大変化が起きそうな状況、いや、こうした状況だからこそ、今まで紙の書籍には距離を置いていた者にも、電子端末という新たな機器を触媒として、言い換えるならば、この新しい機器の登場が読書層を広げる好機、と捉え、そこに一層の地道な「読書」そのものを喚起する働き掛けを起こすべきだと考えている。有明高専のブックレビューコンテストの試みも、その一つとして考えたい。

冒頭に引用した19世紀の貧しい読書好きの青年に書店主が一頁ずつめくってくれたように、電子機器だけが与えられてもそれを使いたくなる衝動を与えることが出来なければ、意味がない。それこそが「書との邂逅の喜び」「読書の楽しさ」ではないだろうか。



平成22年度

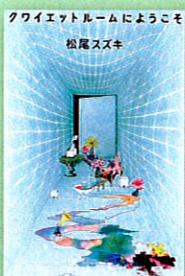
「私の薦める一冊の本」紹介文

入賞作品紹介

昨年度より新しい取り組みとして、400字の「私の薦める一冊の本」と題して、有明高専生によるブックレビューを行っている。自由応募にもかかわらず、今年度は402編ものたくさんの作品が集まつた。これらの作品の中から、優れた作品10編を選出したので、以下に全文を掲載する。

入賞者

建築学科 4年	山崎 春菜	『クワイエットルームにようこそ』
機械工学科 3年	森本 幸宏	『スピニン』
電子情報工学科 3年	成松 瑞基	『NASAより宇宙に近い町工場』
2年2組	松本 光	『失はれる物語』
2年3組	菊田めぐみ	『サマータイム』
2年3組	竹下 美海	『瞳スーパーデラックス』
2年3組	三島紗有実	『Little DJ 小さな恋の物語』
電気工学科 1年	伊木田公貴	『父親たちの星条旗』
物質工学科 1年	藤木 真子	『レインツリーの国』
物質工学科 1年	松本由美香	『雲』



『クワイエットルームにようこそ』

松尾スズキ著

建築学科4年 山崎春菜

主人公「明日香」は、ある日目を覚ますと「クワイエットルーム」にいた。それは、精神病院の閉鎖病棟の、人に迷惑をかける人が入る部屋。明日香は薬の過剰摂取で担ぎ込まれたのだ。

明日香は自殺する気などなかった。これは事故だ。「間違って」ここにいるのだ。そう思いながら、患者やナースと出会う。それは、拒食・虚言・自傷など様々な事情を抱えた人達。そして、その出会いの中で、明日香はある場所にたどり着く。

明るくてバタバタした閉鎖病棟で過ごす人の姿が描かれている。それなのに、決して軽くない、深い。また、登場人物の個性にとても惹かれる。私は「クワイエットルーム」は、ただ人に迷惑をかける人が入る部屋ではないと思う。神様がいて、絶望に陥った人を蘇生に導いてくれる。「ようこそ」の意味が、そこにあるのではないか。可笑しく切ない小説の世界に、誰もが引き込まれるだろう。



『スピニン』

山田悠介著

機械工学科3年 森本幸宏

ネットで知りあつた社会に対して恨みを抱く7人の仲間たちはバスジャックを企てた。彼らの目的地は東京タワー。これが実現されれば今まで自分を馬鹿にしてきた奴らを見返すことができると思っていた。そして各地からバスを乗つ取つた犯人たちは様々な手段を使ってゴールを目指し、到着するまでの長時間の間に様々な乗客と話す。それはこれまであまり外の世界に接していなかつた彼らにとって稀な経験であつたため、バスジャックをしてからそれぞれの人間性は大きく変化し、それに伴いバス内の雰囲気も変わっていく。様々な変化が入り混じる、それぞれの物語が東京タワーでひとつになるとき、果たしてどうなつているのか。また彼らの辿る衝撃の結末とは。

それぞれの物語は少しずつ順番に描かれているため、そのときの全員の状況が分かりやすく、読みやすい。あまり本を読まない人にもお薦めの一冊である。



『NASAより宇宙に近い町工場』
植松 努著
電子情報工学科3年 成松瑞基

北海道の赤平市という人口1万4千人の小さな町にある植松電機。そこで、わずか20人の社員と共に、リサイクル用パワーショベルのマグネット製造と宇宙開発を行っている植松努さん。この本は、その植松さんの生き方に触れるものでした。宇宙開発に関わった経緯、仕事の経営方針、仕事に対する誇りと喜び、失敗談、学ぶ姿勢、人との出会い等。読み進めるに心に響く言葉が、どんどん貯まっていきます。「仕事をする意味は。」「夢って何だろう。」自分自身、考えさせられました。植松さんの常識や既成概念にとらわれない、柔軟で豊かな発想と色々な視点からの考え方、心の中の重石が軽くなつたように感じました。これから社会に巣立つ人達には、特に読んでもらいたい一冊です。何事にも可能性を信じ、諦めずに自分の未来を切り拓いていく勇気をもらえた気がします。「どうせ無理」ではなくて、「だったら、こうしてみたら」がキーワードです。



『サマータイム』
佐藤多佳子著
2年3組 菊田めぐみ

主人公の伊山進が左腕の無いピアニスト、浅尾広一に出会うことからこの話は始まる。とても13歳とは思えないほどクールな広一、素直で真面目な進、わがままで勝ち気な佳奈たちが織りなす、鮮やかで眩しく、そして切なく、きらびやかな世界が描かれている。若さゆえに衝突、葛藤を繰り返しながらも成長する3人の姿。美しいピアノの音色。3人のきらきらと輝く夏の思い出。この本には、若さが持つ無限の輝きや力が凝縮されている。

3人の揺れ動く心を繊細にとらえているので、懐かしく思ったり、ときには共感させられたりする。季節の移り変わりの描写や、比喩表現の上手さにも圧倒される。様々な場面や描写に注目しながらじっくり読んでほしい作品である。また、3人の異なる視点から描かれているので、同じ出来事でも違った角度から楽しむことができる。表現が豊かで読みやすい文体なので読書が苦手な人も是非この作品を読んで特別な時間を過ごしてほしい。



『失はれる物語』
乙一著
2年2組 松本 光

今日は8月4日です。ある朝、妻がそう教えてくれた。でも「自分」には朝日も見えないし妻の声も聞こえない。分かるのは、右腕の上に触れる妻の指だけ。

これは、交通事故で全身不隨となり五感もほとんど失ってしまった男の物語である。光も音も何も感じない暗闇へ突然に投げ出された「自分」は、唯一の外との繋がりである右腕の皮膚感覚で妻との「会話」を試みる。つまり、指で文字をなぞってもらい微妙に動かせる人差し指で返事をするのだ。伝えられる返事はYESかNOのみ。気付けば事故から数年が経過し、妻への「自分」の届かぬ思いは、その動かない体に充満していた……。

極限の状態に置かれた主人公の不安や苦悩、思いが伝わらないもどかしさが、言葉の端々から伝わってくる。妻を思うがこそ最後の決断には胸が押しつぶされるようだ。短編集であり、どれもが心に響く秀作である。若者のみならず、大人にも是非一度読んでほしい。

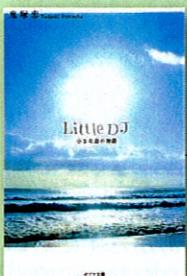


『瞳スーパー・デラックス』
猿渡 瞳著 猿渡直美協力
2年3組 竹下美海

「骨はがんに侵されても心は侵されないよ」
大牟田市に骨肉腫に侵された少女がいた。名前は瞳ちゃん。この本には彼女の闘病生活の日々が綴られてある。

ある日突然余命半年と医師から宣告されたらあなたはどうするだろうか。瞳ちゃんの母親はこの宣告を受け彼女には最初「骨折」と伝え入院をさせていた。しかし彼女の為にもやはり真実を伝えようと思い告知に踏み切る。自分ががんであると初めて知った彼女は意外な一言を。「ママががんじゃなくて私ががんで本当によかった」彼女は常に前向きに病気と向きあつた。逃げなかつた。どんどん体が不自由になつてもわずかな望みに希望を託した。そんな中、彼女は自分の身を削り命懸けで我々に『命を見つめて』という作文を残す。

冒頭のセリフも含め、一言一言が心に響く。彼女の行為が幸せの本来あるべき姿を我々に示唆している。彼女の辿ってきた軌跡、作文、命の叫びを涙なしで読むことはできないだろう。



『Little DJ 小さな恋の物語』

鬼塚 忠著

2年3組 三島紗有実

野球とラジオが大好きな少年太郎。そんな元気な少年に「白血病」という診断が下った。余命9ヶ月と宣告された男の子が、周囲の人々に支えられながら精一杯生きるという、悲しくもとても温かい作品だ。

病院の中でのDJを務めることで元気になっていく太郎を生き生きと描いている。何か大好きなことや大好きなものがあるだけで、闘病生活も前向きに頑張つていけるということ。また、両親、友達、病院の先生。たくさんの人たちの一杯の愛情。生きるということの大好きな意味。いろんなことが感じられた。病気になることを見えることはたくさんあるだろう。それを、普段普通に生きている私たちに教えてくれる一冊となっている。少年のピュアな恋も可愛くて、心もとても暖まる。

読み終えるまでにたくさんの涙が流れてしまった。大好きなこと、大好きな人、生きる希望……。これからも大切に、そして、今この時を精一杯、楽しく生きようと思える作品だ。



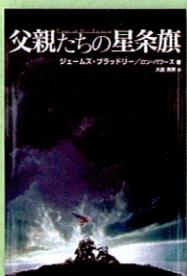
『レインツリーの国』

有川 浩著

物質工学科1年 藤木真子

この本は、「忘れられない本」がきっかけで、インターネットで知りあつた男女の物語だ。ある男の子が、10年ほど前に読んだ本の感想が書かれたサイトを見つけ、自分とは違った考えのサイトの持ち主の女の子と話がしてみたりなりメールを送った。それからメールのやり取りが始まり、彼が実際に会って話そうと言い出す。しかし、彼女は頑なに断る。やっとのことで彼女と会うことが出来たが、時々彼女の様子が変だ。後で彼女に「自分は難聴者だ」と知らされる。すれ違う2人の思いが描かれた、読み手も考えさせられる話である。

彼女視点の所もあり、障害者の気持ちや考えが書かれてあって、今まで自分が障害者に対して、何も考えていないかったのだと思った。彼の「障害」という壁を乗り越えようとする姿。彼女の「障害を持っている」という事に対しての深い悩み。この本を通して、「障害者」とは何か、もう一度考えようと思った。



『父親たちの星条旗』

ジェームズ・ブラッドレー著

電気工学科1年 伊木田公貴

65年前、太平洋戦争は幕を閉じた。この本は1本の棹と星条旗を掲げた、衛生下士官のドク、工員のレネ、一隊員のハーロン、フランクリン、24歳で「おやじ」と慕われたマイク、ピマ族アイラの一生を当時の手紙や仲間や家族の話、その他の貴重な資料により、硫黄島での戦いとその前後が真実のままに書かれている。当時の彼らや多くの隊員は丁度私達と同じ10、20代の青年だった。彼らは若くして戦地へ出撃し死と隣り合わせの中、母国や友のために戦った。その中で命じられ母国の旗を掲げ英雄となった。仲間の死を経験した後彼らは平穀を求めるが現実は違う、戦争に振り回された彼らの姿がある。

当時の戦況、感情が長い時間を越えて書かれてるので、客観的にも主観的にも一つの真実を感じとることができる。戦争を日本以外からの視点から考えたことがある人も、ない人にも是非読んでもらいたい一冊だ。読んだ後、先の戦争が今までと違つて感じられるはずだ。

『雲』

あまんきみこ著

物質工学科1年 松本由美香

この本は、日本が満州國を建国した頃、そこに住む、日本人少女ユキと、中国人少女アイレンの物語だ。当然、自分が守ってきた土地を奪われた、という考えを持つ中国人も現れる。やがて、その中国人と満州國の間に亀裂が出来、争いを招き、一つの町を焼き払う。そして、その争いへ2人の少女は巻き込まれていく。村を守り、隣りの町の中国人とも仲良くしたい村の長。自國を守りたい中国人。日本国民を守る義務のある兵士。現在でも問題視されている、中国と日本の間に起る国交問題。その原点となる物語がここに記されている。

様々な登場人物の、それぞれの視点から見る世界はまったく違う。その人物の性格や立場を考えながら読み進めると、ますます楽しい。又、この平和な環境に生きる私達に、他の国で起きている重く暗い現実に、目を向け直してくれる。今の平和がいかに尊いものであるかということを改めて考えさせられた作品だった。

審査員講評

図書情報管理部室員 菱岡 憲司

最終選考に残った作品はいずれも秀作揃い。それでも選考に迷いはなかった。文の巧拙、語彙の多寡、修辞の良し悪しはあるが、本を紹介するとの主旨に叶った作品は自ずと絞られる。残ったものは、どれも読んでほしいとの想いに溢れ、そのための配慮がなされたものばかり。

また、選考しながら感じたのは、対象とした作品にある傾向がみられること。冒頭で病気・怪我など何らかのマイナスが生じ、物語展開に応じてその困難を恢復する（折り合いをつける）作品が多い。そうした状況設定が、様々なコンプレックスを抱える十代の共感を得るのだろうか。

機械工学科 南 明宏

昨年に引き続いて『私の薦める一冊の本』紹介文の審査員をさせて頂きました。昨年度は、前半好調、後半ややトーンダウンという感じの作品がいくつか見られました。しかしながら、今回は最初から最後までしっかりとまとめ上げた力作が勢揃いであり、選考にかなり悩みました。このことは、本を真剣に読み、内容を確実に把握し、自分の中でその内容を再構築・集約し、分かり易い表現と独自の感想を400字に込めるという一連のプロセスが見事に成されているからだと思います。前回の企画後、時代劇関連のみの愛読から少しずつ他のジャンルも読む機会が増えました。これからも拍車が掛かりそうです。

電気工学科 池之上 正人

最近の本は、映画やドラマなど様々なメディアへ展開（メディアミックス）されていることが多い。メディアミックス作品は通常、原作の内容を変更して製作されていることが多いため、原作本ファンにとっては不満な作品が多いかもしれないが、原作本を知らない人にとっては、これらの作品鑑賞が、新たな本と出会うきっかけの一つとなる。

今回皆さんが書いた紹介文も同じである。紹介文を読んでみると、内容を簡潔にまとめつつ、「ここがステキ！」だとしっかりアピールしており、読んでみたいと思われる作品ばかりであった。今回の紹介文を読めばきっと新たな本に出会えるはずです。

電子情報工学科 嘉藤 直子

今年度の紹介文は力作揃いで、優秀作品を選ぶのに随分悩みました。私が興味を引かれた紹介文は、あらすじだけでなく、自分の考えを自分の言葉（自分なりの表現）で書いてあるものです。そのような紹介文からは、紹介する本への強い愛着が伝わってきました。

審査の最中、ふと、ある旅行会社の方の話を思い出し

ました。「私はお客様に旅行内容をうまく伝えるために、普段からたくさんの本を読んで、言葉に詰まらないようにしている（表現法を学んでいる）」と。自分の考えをうまく文章で表現するためには、普段から多くの本を読むことも必要ですね。これからも本を読み続けていきましょう。

物質工学科 出口 智昭

選考を終えて、この企画は結末をあかさずに短い文章で一冊の本の魅力を表現しなければならないので大変だったと思います。

また、同じ本を選んだ人でもそれぞれの感じたことや印象が違い、さらに文章にすることでの表現の方法に工夫が見られました。

実際に読んでその結末が知りたいと思うような作品が数多くあり、審査中読んでいることが楽しく感じましたが、数ある中からいくつかを選ぶことが難しかったです。

建築学科 薦 敏和

まずは、入賞者の中に1年生がいたことに安堵しております。今年も昨年以上に応募があり、この催しには活気があります。どの作品も、図書の内容を要約し、自分自身の境遇に照らし合わせ、キャッチコピーやキャッチフレーズを入れ、しかも余韻を残しながら終わるので、想像力をかきたてさせられます。さて、この時期年賀状の受付が始まります。そろそろ、あり当たりの挨拶文とウサギの絵を考えないといけません。そして、送り先の人の顔を浮かべながら一筆添えます。ほんの20文字程度書き加えるのに四苦八苦します。毎年、大晦日前後に年賀はがきと格闘するのが習わしとなっている無精者としては、皆さんの努力に敬服します。（12月15日記）

一般教育科 村田 和穂

自分の好きな本、音楽、映画などについて、気の合う友人と気ままにおしゃべりすることは楽しいことです。でも、それを文章で原稿用紙1枚に纏めるとなると簡単にはいきません。何を残して何を削るか、といった（自分なりの）編集作業が必要になってきます。内容やストーリーを紹介しそぎるのも考え方です。むしろ、何故この本を選んだのかという「自分のこだわり」がさりげなく調味料として味付けされると、たった1枚の原稿用紙は立派な「作品」に仕上がります。選ばれた10編はそのような作品になっていると、私は思います。

一般教育科 坂西 文俊

様々な文学作品が取り上げられていましたが、皆さんと一緒に、登場人物の感情やその一冊から得られる教訓まで、うわべだけでなく行間まで深く読み込んでいるなあと感じました。ただ欲を言えば、その一冊を他の人にも是非読んでほしいということを書いている後半部分を、もう少し詳しく文章表現ができていれば、なおよかったです。

また、最近の推理小説は、プロットやロジックだけでなく、登場人物の人間性を見事に描いているものが多く、そのような作品が取り上げられていることに、時代の流れを感じました。

教職員 推薦図書

『日本人のための経済原論』

小室直樹 著
東洋経済新報社



機械工学科
福永 道彦

経済学の入門書で、難しいことを極めて分かりやすく書いた本です。独特の筆致で経済学の基礎を教えてくれるのですが、面白いのは「経済学に数学モデルを用いる意義」について詳しく説明している点です。

大学で劣等生だった私は（それは今もそうなんですが）、工学の講義を聞いていても、一般的な「科学的方法論」に今ひとつ思い至りませんでした。それが経済学の一般書で何となく分かったというは不思議でした。専門外のことだったために、むしろ固定観念がなく理解しやすかったのかもしれません。

経済学部の学生が面白く読めるようなものであるかは分かりませんが、工業高専生、とくに経済学に興味のない人ほど興奮をもって読めるものだと思います。

『峠』

司馬遼太郎 著
新潮文庫



電気工学科
南部 幸久

佐世保高専電気工学科を卒業して長岡技術科学大学（新潟県長岡市）へ編入学したとき、大学の国語の授業の中で「指定図書（長編）を読んで感想文を書く」という課題があり、その中に、この「峠」という小説がありました。授業中に先生から「縁あって長岡に来た以上この小説は是非読んでほしい」旨のお話があったことは、今でも記憶しています。この小説は幕末期の長岡藩の家老：河井継之助について書かれたものであり、文系に疎い私は、河井継之助についてその存在すら知りませんでした。課題ということで（当時活字が苦手だった私としては）どちらかといえば消極的に読み始めましたが、河井継之助の生き方（行動力）や考え方の斬新さに大きく刺激を受けました。世の中が倒幕か否かの極端な二分割思考の中

昨年4月以降に新しく着任された先生方にご自分の印象に残った本や、ぜひ学生に読んでもらいたい本を選んで、エピソードなども交えつつ推薦していただきました。ここで紹介する本は、図書館にも揃えていますので、ぜひ手にとってみてください。

で大混乱しているときに、そのどちらでもない解を模索し、考え、方向が定まれば信念を持って行動する河井継之助の生き様は、妙に高専の学生や卒業生に通じるものを感じています。特に、混沌とした現在の世の中で、進路等を考えるときに多くのヒントと元気を与えてくれそうな気がします。私自身もこの小説の影響をかなり受けて、現在の仕事に常に前向きに取り組めているように思います。読んでみたいという方は、長編ですので、週末や長期の休み等、時間のあるときに読まれることをお勧めします。

『日本語スタイルガイド』

テクニカルコミュニケーター協会 編著
テクニカルコミュニケーター協会



電子情報工学科
菅沼 明

皆さんは今後、さまざまところで文章を書くことになると思います。好むと好まざるとによらず、また、進学先・就職先にもよらず文章を書く機会はたくさんあります。皆さんは理科系（技術系）を志望しているので、書く文章は説明文や論説文に分類されるような文章（技術文章）を書くことが多くなると思います。技術文章は、書き手の意図が読み手にきちんと伝わらなければ意味がありません。そのため、文章を書くときには、曖昧でない文を書く必要があります。

ここで紹介する「日本語スタイルガイド」は、製品マニュアルを作成する際に注意して書くべき項目が具体的に載せられています。マニュアルは、製品の使い方などの要点を的確に表現して、誤解を招かないように作成しなければなりません。その点で技術文章を書く場合と同じです。たとえば、「一文の長さに注意しなさい」、「句読点を正しく打ちなさい」などの用字・用語・表記に関する注意点や、「否定表現に注意しなさい」、「比喩に注意しなさい」などの誤解されない文を書くための注意点などが、例を交えて分かりやすく書いてあります。

この本は、理科系の文章を書く際に大いに役立つと思いますので、皆さんも一度読んでみてはいかがでしょう。そして、紛れのない文、分かりやすい文を書くように心がけてください。



読書感想文紹介

～古今東西の文学作品を題材に～

「文学II」(2年生)の授業で、毎回、古今東西の文学作品を紹介している。もちろん授業であるので、作家や作品に対する基本的な知識を伝え、紹介後は鑑賞文を課す。しかし、本文の抜粋を交えて紹介する間、心がけるのは、学生、そして紹介する私自身も作品世界に没入すること。また「紹介」とはいいながら、それを行う私の素直な感覚では、作品を「ぶつけて」いる。

古典は一見、食べやすくも飲みこみやすくもない。普段暮らしている価値観とはほど遠い、あるいは異国の、あるいは昔の、あるいは架空の小説世界は、とっつきにくい。柔らかく口当たりのよい物語に慣れた目からは、何だか不味そうに見える。しかしそこは教師の特権、ある種の強制力をもって読ませる。ぶつける。そのとき、何かが生まれる。本を読むのに、人として生きるのに、文系も理系もない。これから的人生、理不尽なことも、想像もしなかったことも、喜怒哀楽の多岐にわたって様々な経験をする。そのとき、古典が生きてくる。何しろ時代の淘汰を経て残った作品だ。どんなに奇異で特殊な状況に思えても、そこには人間の真実が描かれている。その真実に触れ、搖さぶられ、考え、肯定し、否定し、保留し、そんなあれやこれやをすべてひっくるめて紡ぎ出した言葉の数々、それが鑑賞文であり、読書感想文だ。

この夏、授業で紹介した本、あるいは自ら選んだ本を対象に、読書感想文を課した。ここに、そのうちの2編を掲載する。紙幅の関係上、載せられなかったものにも、この2編に勝るとも劣らない文章が少なくなかった。その借り物ではない、自ら紡ぎ出した言葉の数々に出会えたことを、私は誇りに思う。(菱岡憲司)

『猫町 他十七篇』(岩波文庫)

萩原朔太郎著

2年1組(電子情報工学科) 伊藤実沙都

猫町一。それは猫ばかりが住む不思議な町。この主人公「私」はその猫町に迷いこむ。

「私」とはどんな人物なのだろう。猫町における登場人物といえば「私」一人だけだと言ってもよいぐらいに他の人間の存在を排除している。文も「私」の語り口調で書かれている。全てが「私」中心に書かれているが、かえってそれが「私」の輪郭をぼかしているように思える。彼の外側が見えないので。内側にある「私」の感情などはよく分かるが、他人の評価がないためどんな顔なのか、太っているのか、やせているのかさえも分からぬ。しかし、わたしはこの本を読みながら自然と「私」の姿を完成させていった。彼が猫町にたどりつくまで考えていたことや、それからの行動を自分と重ね合わせながら。

「私」はひどく日常生活に退屈しているようだった。思考はしばしば冷めた部分を持っていた。その一方でこの退屈さを埋めようと自分の見たことのない世界を見ることについてはとても積極的だった。見たことのない世界といつても、散歩でわざと道をまちがえたりしてその新鮮味をあじわう、というのだ。このようなやり方にはわたしにも覚えがあった。道をまちがう、というものではないが昔小さい頃によく遊び、とても広くて楽しかった公園に十年程たった後行ってみたのだ。そこはただ、何でもない空地のようだった。あんなに広く感じた公園はとても狭く思えだし、すべり台もブランコも普通の公園のものよりも小さいくらいだった。わたしは、この光景に何とも言いきれない喪失感のようなものを感じた。この感情を「私」も同じよう

に感じているように思えた。そう考えると、「私」の姿はなんだか切なく見えた。

そんな「私」はついに、猫町にたどりつく。それはとても異様な光景だろう。店の主人は猫、道を歩く人も猫、花に水をやっているのも猫。けれども日常生活に退屈していた「私」には理想郷とも呼べる場所なのではないか。しかし「私」はようやく手に入れた理想をすぐには放そうとする。彼は自分に夢を見ているだけだ、そう言って猫町を否定するのだ。その姿は実におもしろいと思った。あれだけ日常では理想を追い求めていたのに理想が現実になるとあわてて日常に戻ろうとする。これが「私」の正体なのだろう。現実にも理想にも属さない、フワフワとした存在。誰にでもある不安定な意識の塊である「私」に、自分は重なる部分が多くあったのかもしれない。

猫町にいた猫たちはいったいどういう意味があるのだろうか。気まぐれで自由、というイメージのある猫に「私」は憧れていたのだろうか。猫が人間のよう出てくるからといい、この作品が一気に現実味を失うことはない。「私」が理想から現実に戻った後、つまり現実での猫の存在を認めているからだ。完全に「私」に感情移入してしまっていたわたしは、彼の考えを素直に受け入れていた。

あの猫町はきっとどこかにある。「私」がそう教えてくれた。けれどそれは、わたしが今、この現実に少しの不満を抱いているからであり、もし理想にたどりついたときにわたしも彼のような行動をとるのか。ぐるぐると考えてしまう。読んだ者を「私」のような感覚に陥らせるのもこの作品の魅力なのだろう。

不思議な作品。この一言では言い表せないものが猫町にはつまっている。わたしがいつか「私」になるかもしれないという思いが心の隅に潜んでいて心が少し重い気がする。

『ドリアン・グレイの肖像』(新潮文庫)

オスカーワイルド著、福田恆在訳

2年5組(物質工学科) 田島咲紀

初めてこの小説の全編を読んだ。全てを読んで、文章の美しさに感銘を受けた。まるで唄うかのように綴られる文字が、何の抵抗もなく染みこんでくる。さらりと語られる台詞の一つ一つに、物語の人物が乗り移っているのではないか。そんな雰囲気すら感じさせられた。

ドリアンは本当に綺麗な人間だろう。序盤のドリアンの口調はとても柔らかく、良識を兼ね備えた人物のものだと分かる。ところが、終盤にさしかかるにつれ、彼の口調は荒々しく、刺々しさを感じた。初めは確かに存在した、ドリアン特有の純粹さの欠片も見つけることができないのである。確かに綺麗な人間であったはずなのに、見る影もなかった。僅かな面影も無くなっていたのだ。

読み進める度に醜くなっていくドリアン。しかし、不思議と彼自身に対する嫌悪感は生まれなかつた。普段ならば、その暴虐的な言動に苛つきを覚えたはずだ。ところが、そんなものは微塵も生じなかつた。むしろ胸中を占めたのは、憐れみと悲しみだつた。真っ白だったものが灰色へと変わり、黒へと染められていく様。言葉では表すことが出来ない感情に、キリリと胸を締め付けられた。

ドリアンの容貌は、見ていて気持ちの良いものではない。気持ちのいいものであるはずがない。ただ、虚しさだけが

漂う。

これほどまでに彼が堕落した原因は何だ。悪事を教えたヘンリーか。元を辿れば、肖像画を描いたバジルか。いやー最大の原因是ドリアン自身ではないか。ドリアンの心の奥底に巣くっていた欲求が原因なのだろう。その欲求が、彼を自己愛の塊へと変えてしまったのだ。

ならば、結局ドリアンは何を欲していたのだろう。これほど変化するまでに、彼は何を求めたのか。

ドリアンには眞の理解者が存在しなかった。彼は、孤独だったのだ。寂しかったのだ。その美貌ばかりを褒められ、賞賛される。だが、好奇の目に晒されるばかりの生活に、満足できなかつたのではないか。ドリアンの心には、ポッカリと穴があいていたのである。その穴から吹く孤独の風に、彼は耐えきれなかつたのだ。

「理解されたい。」

「愛されたい。」

ドリアンは、自身の欲求を満たしてくれる、包みこんでくれる、そんな人物を求めていたのだろう。

ドリアンは恵まれていた。しかし、それは本当の意味で恵まれていた訳ではない。醜くなってしまった肖像画は、ドリアンの本来の姿だったのだ。心の隙間を埋めようとしたら彼の魂を具現化したのが『肖像画』という姿なのである。

眞の自分を理解されたかったドリアン。ただ、愛されたかったドリアン。だが、彼の欲求は満たされることはなかった。最後に残ったのは、美しさでも幸福感でもない。残されたのは——見るも無惨な肖像画だけである。

学生図書委員による ブックリサイクル

活動報告

私たち図書委員は、高専祭初の試みであるブックリサイクルを行いました。

ブックリサイクルでは、学校の各教職員又、各学生の協力の下たくさん
の雑誌、書籍、文庫本を集めることができました。

当日に至るまでには、会場となった図書館棟1階のセミナー室の机や本の配置、本の置き方、本の分担作業などを試行錯誤しながらお客様の手に取りやすいように工夫しました。

当日は焼山先生の指導の下で、来場された方々への説明や本の整理などを行いました。1日目の終わりに簡単な反省会をし、2日目にはよりよく利用していただくために改善を行いました。2日間でたくさんの方々が訪れてくださったことにも感謝しております。また、「ありがとう」とお客様に言っていただけて、とてもうれしかったです。

次の高専祭でもブックリサイクルを行えたらいいなと思っております。



有明高專 圖書委員會主催

ブックリサイクル



有明高専の学生と先生方から古本を集めました！
集まつた古本すべてを来校者、本校の学生、教職員の
皆さんに無料で差し上げます！
普段、本を読む機会のない方！
この機会に本を読んでみませんか？
是非、手に取って好きな本を持ち帰り下さい！

日時：10月30日（高專祭1日目）
13時00分～15時00分
10月31日（高專祭2日目）
10時00分～12時00分

2010年 美術ギャラリー新着作品紹介

当ギャラリーは本校の「玄関」としての図書館ロビーを有効に活用するための一環として設置されたもので、地域交流の場を提供することを目的としています。

ギャラリーの展示作品は地域在住のプロの作家の方々の手による非常に貴重な作品を貸与、寄贈していただいて展示しています。

展示作品は年に1回入替えを行いますが、この度、新たに入替えを行った作品は以下のとおりです。

作品名：森の音
作 者：田中 千鶴



作品名：秋韻
作 者：今村 愛子



作品名：花
作 者：木村 和子



作品名：朝陽阿蘇
作 者：加治屋 隆

作品名：バレリーナ
作 者：石井 保



作品名：刻
作 者：古賀 悅子



作品名：街角
作 者：鶴 由海子

作品名：ヒーローは私達
作 者：高口 博文



作品名：御田植祭(A)
作 者：中村 信也



作品名：鬼を払う天舞う炎
作 者：渡辺 和彦

図書館統計

平成21年度利用状況

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数	24	23	26	26	20	19	26	23	21	22	22	22	274
入館者数 総数	4,540	5,485	7,031	7,557	3,586	2,721	4,341	6,225	4,403	4,810	5,783	1,959	58,441
(内夜間)	626	1,210	1,317	1,686	254	0	661	1,164	641	721	1,110	0	9,390
(内土曜日)	132	334	253	198	260	0	201	276	155	188	215	0	2,212
1日平均	189.2	238.5	270.4	290.7	179.3	143.2	167.0	270.7	209.7	218.6	262.9	89.0	213.3
貸出冊数 総数	510	455	544	518	244	266	383	422	434	456	327	125	4,684
(内夜間)	99	137	127	122	40	0	87	107	102	124	69	0	1,014
(内土曜日)	28	18	29	22	13	0	29	32	29	21	7	0	228
1日平均	21.3	19.8	20.9	19.9	12.2	14.0	14.7	18.3	20.7	20.7	14.9	5.7	17.1

分類別図書貸出冊数の推移

年 度	総 記	哲 学	歴 史	社 会	自 然	工 学	産 業	芸 術	語 学	文 学	*そ の 他	合 计
平成17年度	148	49	113	93	763	2,618	13	306	9	1,163	1,889	7,164
平成18年度	114	63	173	140	679	2,179	14	151	26	1,206	2,831	7,576
平成19年度	74	63	53	32	568	1,791	5	61	8	689	793	4,137
平成20年度	88	62	90	67	523	1,756	13	108	48	971	899	4,625
平成21年度	83	59	46	52	587	1,684	12	136	40	1,071	914	4,684
平均	101	59	95	77	624	2,006	11	152	26	1,020	1,465	5,637

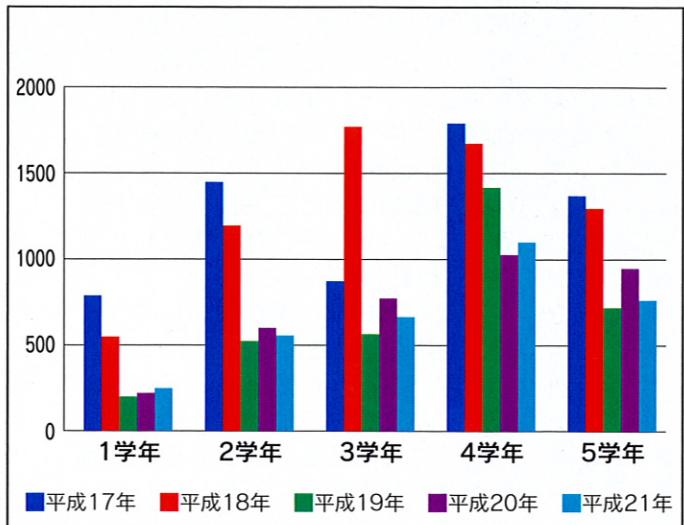
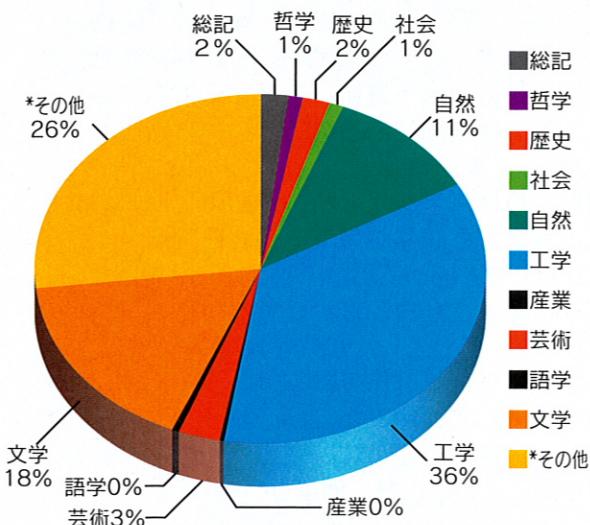
*「その他」は、文庫・新書および雑誌の貸出冊数を示す。

利用状況の推移

年 度	開館日数	利用登録状況			入館者数		貸 出 冊 数			1日当たりの数値		1人当たりの数値			
		総数	(内学生)	(内教職員)	(内学外利用者)	総数	(内夜間土曜日)	総数	(内学生のみの貸出冊数)	(内夜間土曜日)	(内学外利用者)	1日当たり入館者数	1日当たり貸出冊数	学生1人当たり貸出冊数	利用者1人当たり貸出冊数
平成17年度	274	1,355	1,063	182	110	63,160	16,037	7,164	6,587	2,022	202	230.5	26.1	6.2	5.3
平成18年度	271	1,273	1,073	175	25	73,033	14,340	7,576	6,893	1,945	222	269.5	28.0	6.4	6.0
平成19年度	235	1,311	1,099	176	36	40,427	4,990	4,137	3,788	759	126	172.0	17.6	3.4	3.2
平成20年度	274	1,306	1,097	165	44	57,205	11,636	4,625	4,061	1,251	232	208.8	16.9	3.7	3.5
平成21年度	274	1,352	1,085	209	58	58,441	11,602	4,684	3,978	1,242	222	213.3	17.1	3.7	3.5

分類別図書貸出冊数（平成17～21年平均）

学年別図書貸出冊数（学生のみの数字）



郷土の文化財

国指定重要文化財 旧吉原家住宅

文政8年（1825） 大川市小保

妻造、これら2棟を繋ぐ南北棟の成が高い建物、で構成されています。南北棟には大きな土間とそれに沿って並ぶ2列8室があります。道に面した棟には9畳の「上ノ間」と10畳の「二ノ間」があり、畳敷の入側と板張の縁側がL字に廻らされ、南に面しています。また、柱と長押には面皮付きの材が用いられ、繊細な欄間や釘隠しの使用等、瀟洒な造りになっています。それとは対照的に、土間とそれに面する部屋には楠材の立派な差物が用いられ、幅広の板が使用され、豪快な造りとなっています。

旧吉原家住宅は近郊にはみられない豪壮な住宅であり、江戸時代後期の上質な大型民家として貴重なため重要文化財に指定されています。

家具の町として知られる大川市の中で小保と榎津には伝統的な町家が比較的多く残っています。境を接するこの両町は、柳河藩の小保と久留米藩の榎津に分かれています。小保には、江戸時代に小保の別当職を勤め、後に蒲池組の大庄屋を兼ねた吉原家の大きな住宅があります。

道に沿って築かれた高い塀に御成門を設け、そこから斜め前方の位置に入母屋造・妻入の玄関があります。主屋は、道に面した東西棟の横に長い切妻造とそれに平行に奥に設けられた切妻造、これら2棟を繋ぐ南北棟の成が高い建物、で構成されています。南北棟には大きな土間とそれに沿って並ぶ2列8室があります。道に面した棟には9畳の「上ノ間」と10畳の「二ノ間」があり、畳敷の入側と板張の縁側がL字に廻らされ、南に面しています。また、柱と長押には面皮付きの材が用いられ、繊細な欄間や釘隠しの使用等、瀟洒な造りになっています。それとは対照的に、土間とそれに面する部屋には楠材の立派な差物が用いられ、幅広の板が使用され、豪快な造りとなっています。

旧吉原家住宅は近郊にはみられない豪壮な住宅であり、江戸時代後期の上質な大型民家として貴重なため重要文化財に指定されています。

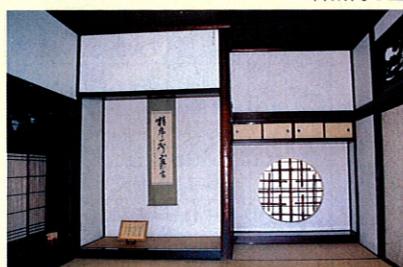
（建築学科 松岡高弘）



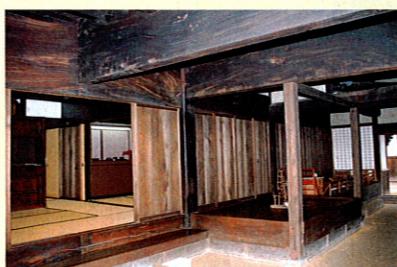
御成門と主屋



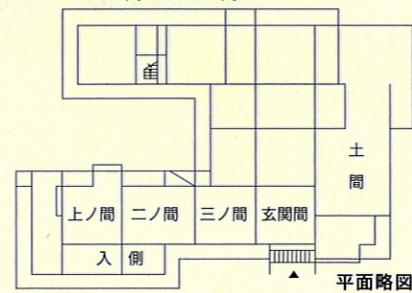
三ノ間から上ノ間



上ノ間



土間



編集後記

ロシアの批評家バフチンは、もともとは音楽のものだった「ポリフォニー」という理論を文学に応用し、ドストエフスキイの小説を論じた。「ポリフォニー」とは、多声性、声の複数性のこと。むずかしいことはぜんぶ省略して乱暴にまとめると、登場人物が、作者の思惑によって完全にコントロールされるのではなく、それぞれが確固とした価値観を持って発言・行動していること。

今回はじめて編集に携わり、まず感じたのがこのことだった。図書館報は、まさに「ポリフォニー」と表現されるような、きちんと主張があり、個性が感じられ、そして今現在を生きている声に満ち溢れている。それらは方向性も大きさもそれぞれ異なる。一步間違えば好き勝手に拡散してしまい

かねない。しかし、その声は、すべて「図書館」のもとに集う。そう、図書館こそが異なる価値観、異なる文化に出会う場所。高専から外につながる道は、じつは正門にあるのではない。図書館のなかにある。

前号よりはじまった「私の薦める一冊の本」に加え、今号から読書感想文も掲載される。どんなに本がたくさんあっても、読まなければ意味がない。どんなにたくさん読んだとしても、考えなければ意味がない。そして、どんなに教員が本を薦めても、学生が読まなければ意味がない。一冊の本に、図書館に、そして有明高専に命を吹き込むのは、学生だ。その意味で、この図書館報から様々な学生の声が聞こえることが、何よりうれしい。（H）